

保育士の「子ども理解」に変化をもたらす契機について

— 新任期と中堅期の違いに着目して —

佐藤 有香*

Triggers of changes in childcare workers' understanding of children

— Focusing on difference between the newly appointed and the mid-career period —

SATO, Yuka

要旨

本研究は、中堅期保育士のこれまでの実践経験の振り返りの語りから、新任期と中堅期の「子ども理解」がどのような契機で変化するか、その内容を明らかにすることを目的とする。具体的には、中堅期の公立保育士3名を対象に、新任期と中堅期に分け、段階的にこれまでの実践経験で「子ども理解」に変化が生じた印象的な出来事についてインタビュー調査を実施した。そこで得られた言語データを質的分析手法であるSCAT (Steps for Coding and Theorization)を用いて分析し「理論記述」を導き出し、新任期と中堅期の特徴を検討した。その結果、新任期から中堅期に継続して見出された契機は、「(1)同僚や熟練保育士等他者の存在」と「(3)養成校・学生時代の経験」であり、新任期のみ契機は、「(2)対象となる子どもの姿」、中堅期のみ契機は、「(4)実践以外の研修や勉強の機会」であり、実践経験の時期により「子ども理解」に変化をもたらす契機に共通点と独自点があることが示された。

キーワード

子ども理解、変化の契機、新任期の保育士、中堅期の保育士

Abstract

This study investigated triggers producing changes in childcare workers' understanding of children between the newly appointed and the mid-career period, based on mid-career childcare workers' narratives of reviewing their practical experience. We interviewed three mid-career childcare workers enrolled in a public nursery school about the significant events causing changes in their understanding of children during the newly appointed and mid-career periods. The results indicated that triggers observed in both periods included (1) others such as colleagues or experienced childcare workers and (3) experiences in the training school and school days. Also, the trigger in the newly-appointed period included (2) the children's condition. Moreover, the triggers in the mid-career period included (4) opportunities for training, study, and practice. These results indicate common and different triggers for changes in childcare workers' understanding of children between the two periods.

Key words

Understanding children, triggers of changes, newly appointed childcare workers, mid-career childcare workers

1. 問題と目的

近年、子どもへの保育に加え、子育て支援や専門機関との連携等、保育施設が担う役割や機能が拡大している。それに伴い、保育の中核を担う保育者の専門性は、保育実践の質に直結するため、新卒の段階から経験を重ねる中で、自らの職務やキャリアに応じて能力を高め、成長を遂げることが期待されている。

専門性の中でも、直接子どもと関わる際に必要となる子ども理解は、最も基礎となる。この子ども理解は、保育施設の第一義の目的である子どもの健全な心身の発達を図るうえで、保育者が必須で獲得すべき力量であり、実践の蓄積により着実に向上することが求められる専門性である。

これまで、子ども理解の重要性は公知のことであり、先行研究でも広く議論され、主に以下の2つの観点から検討

* 聖徳大学大学院 児童学研究科 児童学専攻 博士後期課程修了(非常勤教育職員)

されている。

第1は、保育者の経験年数を指標とし、子ども理解の方法や視点、力量形成に作用する要因について、経験年数の異なる保育者による差異を客観的に分析したものである(志賀, 1996; 高濱, 2001; 佐藤・相良2017; 上村2019)。例えば、佐藤・相良(2017)は、保育者を経験年数で新任者と熟練者に分け、実践中の子どもの心情や内面をどのように理解しているか子ども理解の視点に関する分類カテゴリを用い、2者間の違いを明らかにしている。また、上村(2019)は、子ども理解の形成に影響を及ぼす要因を、質問紙調査から、経験年数による差異を検討している。ここでは、経験年数の少ない保育者の力量向上には、職員間の協同的な園文化の整備が、子ども理解を推し進めることを示している。

これらの研究は、経験年数の経過と共に、力量形成がなされるとの立場から、それぞれの経験年数による保育者の子ども理解に関する力量の成長を分析的に捉えてきた。だが、全ての保育者が経験年数の増加に伴い、必ずしも力量を向上させるとは限らない。数量化されたデータ分析による結果では、保育者の集積された経験の具体性や個別性、成長の契機等質的な部分までは明らかにできない(香曾我部, 2013)との課題がみられた。

第2は、保育者の子ども理解に関する成長や変化の過程を捉えるため、個人的経験との関連を、質的分析アプローチから検討した研究である(上村, 2018; 佐藤・相良, 2019; 佐藤, 2022)。ここでは、熟練者、中堅者、新任者と保育者の経験を一定期間の年数で区切り、その中でどのように子ども理解の捉えや見方が変化したか個人の語りや記述を分析対象に、質的な分析手法であるSCAT(Steps for Coding and Theorization)や複線経路・等至性モデル(Trajectory Equifinality Model; 以下TEM)等を用いて検討している。

上村(2018)は、新卒保育者1名の1年間の子ども理解の変化について、保育者と子ども両者の関係構築過程に焦点化し、そのプロセスをTEMにより分析している。ここでは、対象児に対する信頼、関わりに対する省察、担当者増員が、子ども理解のゆきづまりを乗り越え、理解を深める要因であることを明らかにした。また、佐藤(2022)は新卒保育士3名の1年目の子ども理解に変化を及ぼす契機について、実践の振り返りの語りをSCATにより分析している。その結果、実践開始当初は、子ども理解を行う方法や着目点が分からず手探りの状態だが、熟練保育士による子ども理解の視点の提供や、熟練保育士が実践でモデルとして存在すること、新卒保育士の保育行為を熟練保育士が

意味づけることが重要な契機となり、多角的視点による理解へと変化が示された。

さらに、佐藤・相良(2019)は、熟練保育者6名の子ども理解に変化が生じる契機と状況について、半構造化によるインタビュー調査を実施し、SCATにより分析を行っている。ここでは、子ども理解に変化が生じる際は、目の前の子どもをどのように認識、理解するか保育者自身の内省する能力である個人的要素と園の体制や保育集団、人材の質等環境的要素の両者を同時に進めることが、契機として重要であることを明らかにした。

このように、質的に保育者一人ひとりの経験に焦点を当て分析を行う研究は、実践経験における子ども理解の変化に対する固有の特性が説明され、力量形成を支える上で一定の示唆が得られている。しかしこれらの研究は、「子ども理解」の変化を捉える期間が限定的であり、保育者のキャリア全体での変化を射程とした研究は薄く、数が十分ではないという問題がある。

さらに、上村(2018)、佐藤(2022)は、いずれも養成校を卒業した新卒者1年間のみ子ども理解の変化を検討しており、2年目以降の新任期中堅期の保育者の子ども理解の成長や変化については、現在まで検討されていない。特に実践開始1年経過後は、その後の早期離職を左右する重要な時期であり、実践での力量不足や未熟さを認識し始め、苦悩に直面していくとされている(谷川, 2013)。そのため、この危機的経験をどう乗り切るかが、その後の専門的成長を遂げる重要な分岐点であり、この期間の保育者の子ども理解がどう変化しているか検討する必要がある。そして、新任期中堅期に掛け、どのように実践で「子ども理解」に関する困難を克服しているか明らかにし、力量形成に必要な支援のための示唆を得たい。

そこで本研究は、新任期中堅期の保育者に焦点をあて、保育者の実践経験の振り返りから、「子ども理解」に変化をもたらす契機とその内容について明らかにすることを目的とする。尚、本研究における「子ども理解」は、子どもの存在を様々な側面から捉えるとの立場から、蘇ら(2009)の研究に依拠し「保育者が一人ひとりの子どもとの関わりを通して、その子どもの内面のみではなく、発達や人間関係、周囲の環境要因も踏まて包括的な見方、捉え方」と定義する。また、対象となる新任期中堅期の保育者は、佐藤・相良(2019)の区分に倣い、「子ども理解」の変化に影響を与えると考えられる、実践での経験や環境等の条件を概ね統制し、公立保育所勤務の経験4年の保育士とする。

2. 方法

調査参加者と調査時期

首都圏の公立保育所に勤務する実践経験4年の保育士3名を対象とした。調査参加者は、筆者が公立保育所を所管する役所に依頼し承諾後、調査内容に同意を得られた者である。調査期間は、2018年5月～6月である。

調査手続き

調査は、一人あたり40～50分程度の半構造化によるインタビュー調査を実施した。面接内容は、ICレコーダに録音し、逐語録を作成した。調査は、以下の流れで行った。

①調査概要の説明、同意書の記入②フェイスシートの記入[性別、年代、現在の就労先、経験年数、これまでの転職(転園)経験の有無、新任期(経験1年～3年)、中堅期(4年)の担当クラスの記入]③以下の質問内容についてインタビューを実施した。

調査内容

主な質問項目は、「これまでの保育実践経験の中で、子どもの見方や捉え方、理解の仕方が変化した印象的な出来事について」、「具体的にどのように見方や捉え方が変化したか」である。質問は、過去の実践経験を想起しやすいよう新任期(1～3年)と中堅期(4年)に分け段階的に尋ねた。

分析方法

分析は、インタビューの音声記録から作成した逐語録をデータとし、質的データ分析手法であるSCAT(Steps for Coding and Theorization)を用いて分析する。SCATは、マトリクスの中にセグメント化したデータを記入し、4段階のコーディングを行い、導き出されたテーマ・構成概念を紡ぎストーリー・ラインを記述し、そこから「理論記述」を生成する分析手法である(大谷, 2019)。本研究においてSCATの分析手法を用いる理由は、①比較的小規模なデータにも適応可能であること、②手続きが明確で分析の経過が明示的に記述されること、③複数の分析結果から、さらに大規模な理論へと適用が可能である(大谷, 2008)点からである。

倫理的配慮

本研究は、倫理的配慮として、調査開始前に、調査目的に加え、個人情報の取り扱い、調査倫理に関する事項について口頭で説明し、書面による研究の同意を得た。インタビューは、プライバシーを十分に保護することが可能な場所で実施した。また、本研究は聖徳大学による研究倫理委員会の承諾を得ている(H28U49)。

3. 結果と考察

1. 調査参加者の属性

調査参加者については、3名をそれぞれ、A氏、B氏、C氏とし、概要はTable1に示す通りである。

Table1 調査参加者の概要

対象者	性別 年代	経験 年数	現在の 就労先	担当学年と (クラス体制)	転勤経験 (内訳)
A氏	女性 20代	4年	公立 保育所	1年 → 3歳児(1名) 2年 → 1歳児(3名) 3年 → 1歳児(3名) 4年 → フリー	無 0園
B氏	女性 20代	4年	公立 保育所	1年 → 2歳児(5名) 2年 → 1歳児(4名) 3年 → 0歳児(3名) 4年 → 3歳児(2名)	有 1園 (A市2年、 B区2年)
C氏	女性 20代	4年	公立 保育所	1年 → 1歳児(4名) 2年 → 2歳児(4名) 3年 → 2歳児(4名) 4年 → 4歳児(1名)	無 0園

2. 新任期中堅期の「子ども理解」に変化をもたらす契機のストーリー・ラインと「理論記述」の考察

対象者3名の逐語録を、SCATを用いて分析し、それぞれのストーリー・ラインと「理論記述」の結果と考察を以下に示す。ストーリー・ラインを構成するテーマ・構成概念には下線を引き、「理論記述」を【 】で記し、具体的語りについては、「_」で表記する。「理論記述」枠内の番号は、「理論記述」番号とする。

(1) A氏の新任期中堅期の「子ども理解」に変化をもたらす契機のストーリー・ラインと「理論記述」

A氏の「子ども理解」に変化をもたらす契機は、新任期中3点、中堅期に1点の「理論記述」が見出された(Table2)。

新任期の1点目の契機は、A-①【入職直後の保育士は、実習園と就職園の子どもへの関わりに対する方針の違いへの気づきの変化の契機となる】であった。これは、1年目入職直後に養成校時代の実習園での「子ども理解」と就職園の「子ども理解」に対する方針の対比からの気づきが契機となったものである。

ここでは、実習先での保育士が子どもを見守ることが中心の「子ども理解」から、就職園での子どもへの積極的な関わりを通じた理解を経験したことで、より子どもの行動や心情に焦点化され、「子ども理解」に対する方針がポジティブに変化が生じたものである。

新任期の2点目の契機としてあげられたのは、A-②【新任期の保育士は、計画立案時に子どもの成長に必要な事柄の把握し、計画に生かすという保育士の専門的視点から考える機会が子ども理解の変化の契機となる】であった。これは、1年目の園行事の活動内容を考える場面であった。A氏の就職先では、日常の子どもの遊びを行事内容に生か

すことが求められた。しかし、入職間もないA氏は、子どもとの遊びの中で、何に興味・関心があるか等子どもの経験の内容まで考えが及んでいなかった。その際、「子どもたちが次につながるような遊び方をしてこなきゃいけなかったんじゃないか」と、保育士として専門的に、子どもの遊びの意味や子どもの興味・関心や心情を把握する重要性に対する気付きが変化の契機へとつながったものである。

新任期の3点目の契機は、A-③【新任期の保育士は、熟練保育士による複合的視点からの子ども理解の必要性への気づきが、「子ども理解」の変化の契機につながる】である。これは、A氏の新任期の「子ども理解」の変化において、非常に大きな影響を与えた契機であった。そこでは、2年目に同じクラスの担当となった熟練保育士(本研究での熟練保育士は、経験年数のみではなく「子ども理解」の力量が熟練している者とする)との実践経験の中で、子どもの行為の背景にある複雑な思いや発達、体調等を踏まえた保育士としての専門的関わりの姿を観察することになった。

また、日常的に関わりが困難な子どもに対する情報共有や自身の子ども理解の見立てに対する熟練保育士の異なる見解や新たな視点に触れる機会が、「子ども理解」の変化につながった。子ども同士のトラブル場面での原因の読み取りの際には、「そこにどんな思いがあるかみたいところまでは、そこまで深く考えてなくて、(中略)単純な理由だと思ってたんですけど、その思いや子ども同士の関係性もあるってことを、その先生から結構教えてもらいました」という言及があり、新任期の保育士が「子ども理解」を進める上で熟練保育士から多くの示唆を得ている様子がみられた。

次に中堅期の契機である。A-④【中堅期の保育士は、「子ども理解」に関する研修の場で、他者の見解や視点に触れ、心情理解について思考することが多角的視点による「子ども理解」へと変化の契機となる。】が契機として見いだされた。

A氏の所属する自治体の方針により、園内外問わず、対応に苦慮する子どもや心情理解が困難な場面に対する事例検討の機会が多く設定されていた。その中で、「先輩たちの関わりを聞くと、そうやって最後まで寄り添ってるんだとか、(中略)こういう工夫をしてるんだなあと感じることが多くって」との言及があり、A氏にとって、研修の場での多様な「子ども理解」に対する意見や考えに触れる事が、重要な機会であったことが窺えた。経験年数4年の中堅期になると、他保育士の実践を観察する余裕が生まれ、他者による子どもの心情に寄り添う実践や心情推察の工夫に触れることが、「子ども理解」に変化を生じさせたのだと推測する。A氏は、新任期に一定の「子ども理解」に対する知識が蓄積され、中堅期に掛け、さらなる「子ども理解」に対する意欲から、他者の新たな見解に触れる機会を求め、多様な視点が獲得されていったと予想される。

(2) B 氏の新任期中堅期の「子ども理解」に変化をもたらす契機のストーリー・ラインと「理論記述」

次に、B氏の「子ども理解」に変化をもたらす契機として新任期2点と中堅期2点(Table3)についてみていく。

新任期の1点目の「子ども理解」の契機は、B-①【新任期の保育士は、有効的な子どもの心情推察や行動傾向を把握するモデルとなる熟練保育士の存在が、多角的視点からの子どもの捉えを可能にし、「子ども理解」の変化の契機とな

A氏 ストーリー・ライン

A氏は、入職直後に実習園と就職園の子どもへの関わりに対する方針の違いへの気づきの変化の契機となっていた。また行事の計画立案時に、保育士の専門的視点から子どもの成長に必要な事柄を把握し、計画に生かそうと考える機会が、子ども理解の変化につながっていた。続いて2年目に、同僚熟練保育士の複合的視点からの子ども理解の必要性への気づきの変化の契機となった。そして、最後に中堅期の契機としてあげられたのは、園内外による子ども理解に関する事例検討の機会であった。そこでは、他者の子どもの心情理解に対する視点や推察する際のコツに触れることで、多角的視点からの「子ども理解」へと変化が生じた。

Table2 A氏の新任期中堅期の「子ども理解」の変化にもたらす契機に関する「理論記述」

新任期

A-①入職直後の保育士は、実習園と就職園の子どもへの関わりに対する方針の違いへの気づきの変化の契機となる。

A-②新任期の保育士は、計画立案時に保育士の専門的視点から子どもの成長に必要な事柄を把握し、それを計画に生かそうと考える機会が、子ども理解の変化の契機となる。

A-③新任期の保育士は、熟練保育士による複合的視点からの子ども理解の必要性への気づきが「子ども理解」の変化の契機につながる。

中堅期

A-④中堅期の保育士は、「子ども理解」に関する研修の場で、他者の見解や視点に触れ、心情理解について思考することが多角的視点による「子ども理解」へと変化の契機となる。

る]であった。これは、入職1年目に出会ったB氏にのみ^{かんじよく}痼癢を示す2歳児に対する理解困難の場面で、同僚の熟練保育士による特性に合った関わりや予め対象児の内面の動きを予測した上での援助を観察することが契機となり「子ども理解」が変化したものである。「関わり方を見て、(中略)『こうしようよ』ってというような話し方してて、で、実際、また着替えない時にやってみたら、その子がすごくやったので、そこでハッと気づいた」との言及から、熟練保育士の対象児に対する、言葉掛けや関わり方がモデルとなっていた。

また、熟練保育士による関わりや援助の意図を直接解説してもらうことで、子どもの想いや心情の動きに対する理解を広げていく様子がみられた。新任期の保育士にとって熟練保育士は、先述のA氏のA-③でも示されているように、子どもに対する見解や新たな視点の提供者、また「子ども理解」のモデルとしての意味合いがあることが示唆される。特に、実践経験の少ない時期は、「子ども理解」の手がかりや視点に対する自分自身の知識量も少ないため、経験豊富な他者からの子どもに対する見方や捉え方を吸収している段階であることが窺える。

新任期の2点目の契機は、B-②【新任期の保育士は、過去の知識や経験が通用しない子どもに対する理解困難の自覚が、行動傾向や特徴把握につながり、子どもの発言の背後にある思いや要求に対する理解が促進し、「子ども理解」に変化が生じる契機となる】であった。B氏は、実践開始1年間で「子ども理解」の力量の未熟さは自覚しながらも、徐々に心情を読み取る際に重視する事柄や視点を理解し、

手応えを感じていた。その中で、2年目に担当した1歳児の子どもは、心情が読み取り辛く、これまでの経験や知識が通用せず翻弄されていた。そこで先輩保育士からの子どもの行動の理由や心情に対する解説を参考に、個別の理解を蓄積することで、子どもの傾向や特徴の理解が促進され、心情推察が可能になったのである。

次に中堅期の契機である。1点目は、B-③【中堅期の保育士は、自力での心情理解に困難を覚えると、熟練保育士からの新たな視点や見解を参照し、改めて理解し直すことが、「子ども理解」の変化の契機となる】であった。ここでは、中堅期に掛け、子どもの行動の原因予測が困難な場合に、「やっぱりすごい自分の中で、いっぱい考えて、(中略)あらゆることを探してやってみてましたね」と、初めは自力で推察する姿がみられた。それでも理由が分からない際には、「一緒に組んでいる先生に『何ですかね』って聞いて、「こうじゃない?』って教えていただいたのをやってみて、「あっ、こうだったんだ」って分かる感じでした」と同僚の熟練保育士へ援助を求めている言及がみられ、熟練保育士からの新たな子どもへの見解や視点に触れることが契機となり、改めてその見解を基に子どもに関わることで、「子ども理解」に変化が生じたものである。ここでの熟練保育士は、新任期の視点の提供やモデルとしての存在ではなく、まずは自力で「子ども理解」を試み、そこでつまづきがみられた時に、新たな見解やヒントを示す存在と時期により役割に違いがあることが示された。

中堅期の2点目の契機は、B-④【中堅期の保育士は、学生時代からの実践に関する記録を取る習慣が、継続的な省

B氏 ストーリー・ライン

B氏は、1年目で関わりに苦慮していた子どもに対し、同僚熟練保育士の子どもの心情推察や行動傾向把握する有効的な関わりがモデルとなり、多角的視点からの子どもの捉えが可能になったことが「子ども理解」の変化の契機となる。続いての契機は、B氏が2年目の1歳児担当時、過去の自分自身の知識や経験が通用しない子どもに対する理解困難の自覚により、子どもの行動傾向や特徴の把握が促進され、子どもの発言の背後にある思いや要求に対する理解につながり、「子ども理解」の変化の契機となる。続いて、中堅期に入り、B氏が初めて0歳児担当となり、自力での心情理解を試みるも困難な場合、先輩熟練保育士からの新たな内面の見立てや視点を参照し、改めて理解し直すことが、「子ども理解」に変化をもたらす契機となる。B氏の最後の契機は、学生時代からの実践に関する記録を取る習慣が、継続的な省察を促す機会となり「子ども理解」の変化の契機となっている。

Table3 B氏の新任期と中堅期の「子ども理解」の変化をもたらす契機に関する「理論記述」

新任期

B-①新任期の保育士は、有効的な子どもの心情推察や行動傾向を把握するモデルとなる熟練保育士の存在が、多角的視点からの子どもの捉えを可能にし、「子ども理解」の変化の契機となる。

B-②新任期の保育士は、過去の知識や経験が通用しない子どもに対する理解困難の自覚が、行動傾向や特徴把握につながり、子どもの発言の背後にある思いや要求に対する理解が促進し「子ども理解」の変化が生じる契機となる。

中堅期

B-③中堅期の保育士は、自力での心情理解を試みるも困難を覚えると、熟練保育士からの新たな視点や見解を参照し、改めて理解し直すことで「子ども理解」の変化の契機となる。

B-④中堅期の保育士は、学生時代からの実践に関する記録を取る習慣が、継続的な省察を促す機会となり「子ども理解」の変化の契機となる。

察を促し「子ども理解」を変化させる契機となる】であった。B氏は、学生時代の部活の影響から、実践開始直後から無理の無い範囲で継続して、実践での疑問点や課題、先輩からの助言等を記録していた。この過程の中で、自身の保育展開の仕方、子どもへの関わりや心情理解等について省察が行われ、自身の実践を客観的に振り返ることで、新たな気づきへと変化が生じたものである。B氏自身は、意図的に記録を通して省察を行うとの認識はないが、実践を振り返り言語化することを通して、自身の保育行為の意味や他者の子どもへの関わりや意図について捉え直し、結果的に過去の自分自身の理解の枠組みを修正していったと考える。

(3) C氏の新任期と中堅期の「子ども理解」に変化をもたらす契機のストーリー・ラインと「理論記述」

C氏のこれまでの「子ども理解」の変化の契機は、新任期で2点、中堅期で1点見出された(Table4)。

新任期の1点目の契機は、C-①【新任期の保育士は、熟練保育士による手厚い協働、連携が安心感につながり、徹底した子どもの行動観察が多様な視点からの行動理由の模索を促し、「子ども理解」の変化の契機となる】である。これは、C氏が1年目に同クラスの熟練保育士の支援のもと、心情理解を行う上での視点や助言を受けたことが変化の契機となったものである。そこでは、具体的に子ども心情を探る際の視点や子どもの背後にある発達段階や家庭環境等を踏まえ理解する重要性についての気づきがあった。新任期の保育士は、子どもの行動を「できた・できない」と捉える傾向があり、行為の意味を読み取るに至らない段階のため(多田・後藤・上月・光成, 2016)、実際の子どもの姿と照らし、熟練保育士の子どもの見方や意図に触れるこ

とは、「子ども理解」の力量獲得には重要な機会になると考える。

新任期の2点目の契機は、B-②【新任期の保育士は、学生時代に得た知識や家庭からの有益な情報が、目の前の子どもの姿と統合されることが、「子ども理解」の変化の契機となる】であった。ここでは、B氏の担当クラスの特別支援児の理解において、家庭との良好な連携や学生時代の知識等、複数の情報が統合されたことが、発達や行動特性の把握につながり、「子ども理解」を変化させる契機となったものである。C氏は当時、対象児の突然の発言の意図が分からず困惑していた際、学生時代の授業で得た障害の感覚特性の知識と目の前の子どもの姿が合致し、発言の理由の理解に変化が生じていた。B氏の特別支援児との実践が、変化の契機として捉えられた要因は、日常的に母親と対象児に関する情報共有をしていたことと自身の知識が統合されたことで、園での行動や特性理解につながり、「子ども理解」の変化の契機となったと考える。

最後に、C氏の中堅期の契機についてである。ここでは、1点C-③【中堅期の保育士は、同僚保育士との連携や意思疎通に課題がある場合においても、別の同僚保育士と子どもに対する情報交換や心情理解を十分に共有する機会があることが、「子ども理解」の変化の契機となる】があげられた。これは、同クラス担当の同僚保育士との連携に課題がある場合でも、別の同僚保育士と子どもに関する情報共有や意見交換をする機会があることをあげている。ここでは、C氏を含む正規保育士2名と非常勤保育士2名による計4名体制でのクラス運営を行っていた。当時C氏は、ペアを組む正規保育士と実践での子どもの姿の共有や意見交換等連携が機能せず対応に苦慮していた。その中、子どもに対

C氏 ストーリー・ライン

C氏の入職1年目は、実践での緊張はあるが、熟練保育士の手厚い協働、連携が安心感につながり、徹底した子どもの行動観察が多様な視点からの行動理由の模索につながり、「子ども理解」の変化の契機となった。続いての「子ども理解」の契機は、2年目に特別な支援を要する子どもを担当した際、家庭からの有益な情報携と学生時代に得た特別支援に関する知識が統合され、「子ども理解」の契機となった。最後は、C氏が中堅期に入り、クラス担当の同僚正規保育者との連携や意思疎通に課題があった時、共にクラスを担当している別の同僚保育者と子どもに対する情報交換や心情理解を十分に共有する機会があることが、「子ども理解」の変化の契機となる。

Table4 C氏の新任期と中堅期の「子ども理解」の変化をもたらす契機に関する「理論記述」

新任期

C-①新任期の保育士は、熟練保育士による手厚い協働、連携が安心感につながり、徹底した子どもの行動観察が多様な視点からの行動理由の模索を促し、「子ども理解」の変化の契機となる。

C-②新任期の保育士は、学生時代に得た知識や家庭からの有益な情報が、目の前の子どもの姿と統合されることで、「子ども理解」の変化の契機となる。

中堅期

C-③中堅期の保育士は、同僚保育士との連携や意思疎通に課題がある場合においても、別の同僚保育士と子どもに対する情報交換や心情理解を十分に共有する機会があることが、「子ども理解」の変化の契機となる。

する協議の場を、実践経験豊富な非常勤保育士と日常的に設けることができていた。そこでは、ペアの正規保育士との実践での連携が期待できない中、非常勤熟練保育士との議論を通して子どもの行動の理由や心情に関する読みを深める契機となっていた。現在保育現場では「チーム保育」の重要性は認識されているが、実際に保育士同士円滑に連携が取れ、協働的な実践を行うには課題もみられる(三谷, 2006)。その中で、今回の結果から、中堅期に差し掛かり実践での経験のある程度重ねると、仮にクラス内の保育士同士の連携が困難な場合であっても、他に子どもに関する協議の場があることが、「子ども理解」の契機となることが示された。

4. 総合的考察と今後の課題

本研究では、保育士3名の新任期中堅期の「子ども理解」の変化をもたらした契機について検討を行った。その結果、新任期中堅期では7点、中堅期では4点の契機が見出された。そこで総合的考察として、これらの契機が、実践経験の時期によりどのような特徴があるか、新任期中堅期に

分け項目を整理し検討した(Table5)。

その結果、新任期中堅期の保育士の「子ども理解」の契機の中で、共通した契機として整理されたのは、(1) 同僚や熟練保育士等他者の存在と(3) 養成校・学生時代の経験の2点であった。

この(1) 同僚や熟練保育士等他者の存在の契機は、佐藤(2022)の新卒保育士1年目の「子ども理解」の変化においても同様の契機が見出され、特に新卒1年目から中堅期の保育士にとって「子ども理解」の力量の素地を培う時期に、熟練保育士の支援が非常に重要であることが示された。先行研究でも新卒を含めた新任期の保育士にとって、熟練者は、実践に対する助言(高濱, 2001)や「子ども理解」の視点を提供したり、実際に「子ども理解」をどう行うかモデルを示すことは報告されていた(佐藤, 2022)。しかし、今回新たに中堅期での熟練保育士は「子ども理解」に関する知識や捉えに対する整理を行うことが示され、新任期中堅期で熟練保育士の役割の違いを明らかにできた点は意義があると考えられる。

経験の少ない保育士が実践で「子ども理解」の力量形成

Table5 新任期中堅期の「子ども理解」に変化をもたらす契機に関する「理論記述」の分類

時期	契機	理論記述	理論番号
新任期中堅期	(1) 同僚や熟練保育士等他者の存在	・新任期の保育士は、熟練保育士による複合的視点からの子ども理解の必要性への気づきが「子ども理解」の変化の契機につながる。	A-③
		・新任期の保育士は、子どもの心情推察や行動傾向を把握するモデルとなる熟練保育士の存在が「子ども理解」の変化の契機となる。	B-①
		・新任期の保育士にとって「子ども理解」が困難な場合、熟練保育士との協働、連携のもと、心情推察の方略や行動理由の可能性を探ることが、「子ども理解」の変化の契機につながる。	C-①
	(2) 対象となる子どもの姿	・新任期の保育士は、計画立案時に子どもの成長に必要な事柄を把握し、計画に生かすという保育士の専門的視点から考える機会が子ども理解の変化の契機となる。	A-②
		・新任期の保育士は、過去の知識や経験が通用しない子どもに対する理解困難の自覚が、行動傾向や特徴把握が促進され「子ども理解」に理解を生じさせる契機となる。	B-②
		・新任期中堅期に特別支援児の行動特性や心情理解を行う際、学生時代の知識や家庭からの情報が目の前の子どもの姿と統合されると「子ども理解」の変化の契機となる。	C-②
(3) 養成校・学生時代の経験	・入職直後の保育士は、実習園と就職園の子どもへの関わりに対する方針の違いへの気づきの変化の契機となる。	A-①	
中堅期	(1) 同僚や熟練保育士等他者の存在	・中堅期の保育士は、自力での心情理解に困難を覚えると、熟練保育士からの新たな視点や見解を参照し、改めて理解し直すことが「子ども理解」の変化の契機となる。	B-③
		・中堅期の保育士は、同僚保育士との連携や意思疎通に課題がある場合においても、共にクラス担当の他保育士と子どもに対する情報交換や心情理解を共有する機会があることが、「子ども理解」の変化の契機となる。	C-③
	(3) 養成校・学生時代の経験	・中堅期の保育士は、学生時代からの実践に関する記録を取る習慣は、省察を促し「子ども理解」を変化させる契機となる。	B-④
	(4) 実践以外の研修や勉強の機会	・中堅期にかけ、「子ども理解」に関する研修の場で、他者の見解や視点に触れ、心情理解について思考することが「子ども理解」の変化の契機となる。	A-④

を図るには、熟練保育士の存在が重要であることは周知であったが、実際にどのような援助を行うか熟練保育士個人の経験に頼る部分が多かった。本研究の結果から「子ども理解」の力量形成には、保育士の経験の時期により熟練保育士が、援助内容や支援の方法を柔軟に変えて対応することが必要であることが示唆された。その為には、熟練保育士自身が支援する新任期と中堅期の保育士が、実践の中で「子ども理解」に対して何につまずき、どのような状態であるか把握する能力が求められる。今回は、公立保育所の保育士を対象とし、「子ども理解」の力量が熟練した保育士が存在したため、新任期と中堅期共に変化の契機として見いだされたが、必ずしも各保育施設に熟練保育士が存在するとも限らない。

今後は本研究で得られた保育士の経験の時期による契機の違いを、「子ども理解」の熟練した力量を持ち合わせていない保育士が所属する保育施設等の研修や教育に活用していくことが重要であろう。

また、(3) 養成校・学生時代の経験も新任期と中堅期の両方で共通して見出された契機であった。今回新たに、中堅期においても実習や学生時代の経験が、その後の「子ども理解」の変化に重要な影響を及ぼすとの結果は、養成校教育の重要性を指摘するものであると考える。養成校や実習を受け入れる保育施設は、保育士としてその後の「子ども理解」に対する構えや価値観を培う肝要な時期であることを自覚し、教育や指導内容を問うことが求められる。

そして、今回新たに中堅期のみで見出された契機は、(4) 実践以外の研修や勉強の機会であった。ここでは、中堅期に入り、実践での子どもの姿や知識は、新任期の経験の中である程度蓄積されているが、それをどのように活用すれば良いか漠然としている状態で、研修という機会を通して子どもの捉えや、心情に対する読み取りが整理、構造化されたことで変化が生じたのだろう。実践において、着実に「子ども理解」の力量を向上させていく上では、特にある程度実践での子どもとの関わりを経験した中堅期の保育士には、自身の「子ども理解」に関する知識を整理付け、再統合する場として実践の事例を持ち寄りケーススタディや研修に参加していくことが必要であろう。

今回中堅期の保育士の「子ども理解」の変化に関する先行研究が少ない中で、本研究の結果は有益な知見であると考えられる。

最後に、本研究の課題について述べる。今回の結果は、条件を統制するため3名の公立保育所勤務の保育士を対象としたが、幼稚園教諭や保育教諭、私立園では異なる結果が予想されるため、調査対象者を増やし、中堅期の契機を

検討していく必要がある。また今回は全ての保育士が、経験年数4年と中堅期に入って間もない保育士を対象としたが、中堅期の保育士の成長や変化は、個人差が大きい(高濱, 2001) ため、今後は中堅期の経験年数の幅を拡大し検討していきたい。

引用文献

- 香曾我部琢. 保育者の転機の語りにおける自己形成プロセス-展望の形成とその共有化に着目して-. 保育学研究, 2013, 51, 1, 117-131.
- 三谷大紀. 保育者が「協働」していく時-新人保育者と先輩保育者の関係変容過程をてがかりとして-. 青山学院大学教育学会紀要「教育研究」, 2006, 50, 117-136.
- 大谷尚. 4ステップコーディングによる質的データ分析手法SCATの提案 - 着しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続き -. 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要(教育科学). 2008, 54, 2, 27-44.
- 大谷尚. 質的研究の考え方 研究方法論からSCATによる分析まで. 初版, 名古屋大学出版会, 2019, 403.
- 佐藤有香・相良順子. 保育者の経験年数における「幼児理解」の視点の違い. 日本家政学会誌, 2017, 68, 3, 103-112.
- 佐藤有香・相良順子. 熟練保育士における「子ども理解」に変化をもたらす契機についての質的研究 - 保育実践の振り返りの語りから -. 教師学研究, 2019, 22, 2, 47-57.
- 佐藤有香. 新卒保育士における1年目の「子ども理解」の変化とその契機 - 保育実践の振り返りの語りによる質的研究 -. 乳幼児教育・保育者養成研究, 2022, 2, 89 - 101.
- 蘇 珍伊・香曾我部琢・三浦正子・秋田房子. 保育・幼児教育現場における保育者の子ども理解の視点と研修ニーズ - 園長・主任と一般保育士・教諭の比較を中心にして-. 現代教育学研究紀要, 2009, 2, 105-111.
- 志賀智江. 幼児理解促進のための教師教育に関する研究. 初版, 風間書房, 1996, 216.
- 高濱裕子. 保育者の熟達化プロセス: 経験年数と事例に対する対応. 発達心理学研究2001, 11, 200-211.
- 谷川夏美. 新任保育士の危機と専門的成長-省察のプロセスに着目して-. 保育学研究, 2013, 51, 1, 105-115.
- 多田琴子・後藤晶子・上月素子・光成研一郎. 2年目幼稚園教諭の職能形成をはかる研究者のかかわりについて. 神戸常盤大学紀要, 2016, 9, 63-70.

上村晶. 保育者の子どもの関係構築プロセスを可視化する試み. 桜花学園大学保育学部研究紀要, 2018, 17, 13-29.

上村晶. 保育者の熟達化と子ども理解の関連性に関する研究(3). 桜花学園大学保育学部研究紀要, 2019, 19, 29-43.

謝辞

本研究にご協力いただきました保育士の皆様に心より感謝申し上げます。また、聖徳大学大学院においてご指導を賜りました相良順子先生に、深く御礼申し上げます。

付記

本論文は、日本保育学会第75回大会における発表内容に加筆・修正を加えたものである。